

# 日本の伝統的空间に現れる陰影の意匠性に関する研究

川崎雅史\*・堀 秀行\*\*・佐佐木綱\*\*\*

本研究は、日本の伝統的な空間に現れる陰影の意匠性を把握するための一つの方法として、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」に表現された陰影とその演出のしくみを景観論的に整理したものである。はじめに、景観論的な視点を設定するために陰影の基本構成と基本類型の定義を行い、「陰翳礼讃」に表現された陰影の典型を抽出した。さらに、抽出された陰影の構成要素ごとに美的な演出方法についての考察を行った。

**Keywords :** shadow and shade, traditional space, design

## 1. はじめに

景観の変動要因であり、光と物体との関係で生じる陰影は、その景観的印象的な高まりや奥行きを増すことが指摘されている。これまで、建築の日影規制や照明計画を対象とした環境工学などの分野で、陰影の物理的側面を計測し、日影図や日影時間図を使って設計基準を考慮したり、採光・照明の機能的配置に関する議論が行われてきた<sup>1)</sup>。また、CG（コンピューター・グラフィックス）の分野では、影づけ（シャドーイング）や陰づけ（シェイディング）といった面の立体感や空間的な位置関係を表現する映像化技法が確立している<sup>2)</sup>。

本研究は、このような陰影の物理的側面とは別の見方、すなわち人が景観を鑑賞するという景観論的な視点を基礎として、陰影が現象として成立している空間の基本的な整理とその意匠性を把握することがねらいである。陰影が人々にどのような美意識を働きかけるのか、また人々は陰影に何を見い出そうとしたのかを明らかにするための一歩として、文芸評論である谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」に表現された日本の伝統的空间に現れる陰影の典型を陰影の景観論的な視点から整理する。「陰翳礼讃」は、日本の生活様式や風俗の独自性を説き、日本建築とその周辺に現れる陰影に関する伝統美的本質を探ろうとした先駆的な文明批評であり<sup>3)</sup>、現在においても多くの建築や都市評論に引用されている。滝沢は、奥深い暗さを表現する陰影は、空間の未分化の中にこそ生まれる要因であり、建築が近代化、分化されてゆく中で、情緒性を色濃くもつ日本人の生活がこのような未分化を大切に保守してきたことを指摘している<sup>4)</sup>。また、ヘンリー・プラ

マーは、水晶のもつ濁りのある光や、漆器に映る蠟燭や灯明の輝きを引用し、建築家カルロスカルバの半透明のガラスを使用する作品、ベニスの運河周辺の水蒸気を含む空気のよどみを説明し、鈍い光のもつ独特の雰囲気を説明している<sup>5)</sup>。芦原は、隠れた秩序の中で、西欧建築の対称性や完結性など空間の形式を示す物の「陽」に対して、空間の力やよどみをもつ日本の軒下の陰など空間の内容を示す物の「陰」の重要性を陰翳礼讃を引用して述べている<sup>6)</sup>。

「陰翳礼讃」の中で、谷崎は「日本が西欧の文化に沿うて開発の道を歩み出したときに、勇往邁進するより外に仕方がないが、日本に課せられた文化的な損失は覺悟しなければならない。」と述べ、「その損を補う道があるとすれば、例え文学藝術等かもしれないと考え、われわれが既に失いつつある陰翳の世界を、せめて文学の領域へでも呼びかえしてみたい。」と結んでいる<sup>7)</sup>。当時、失いつつあった日本の伝統的な文化に対して、危機感を持ち、文学の領域へその保存や再生を求めた谷崎の「陰翳礼讃」にもう一度光を当て、陰影の美を掘り起こしてみることは、現代の景観意匠においても有益な示唆を与えるものと考えられる。

そこで、本研究では日本の伝統的な陰影に関する意匠性を把握するための一つの方法として、「陰翳礼讃」に表現された陰影美とその演出のしくみを陰影の基本構成要素ごとに分析し、整理することを目的とする。初めに、研究全体を通じて景観論的な視点を設定するために、陰影の基本構成と基本類型の定義を行う。次に、「陰翳礼讃」に表現された日本の伝統的な陰影の典型を抽出し、その構成要素ごとに美的な演出方法についての整理をする。

## 2. 陰影の基本構成

これまで、筆者らは陰影の基本構成と基本類型に関しての定義を行っているが<sup>8)</sup>、本研究の分析を進めてゆく

\* 正会員 工修 京都大学大学院工学研究科助手  
\*\* 環境地球工学専攻 (〒606 京都市左京区吉田本町)  
\*\* 学生員 京都大学大学院工学研究科  
\*\*\* 正会員 工博 京都大学大学院工学研究科教授

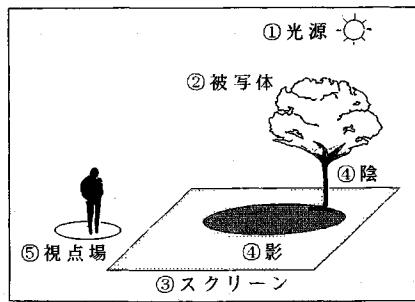


図1 陰影の基本構成

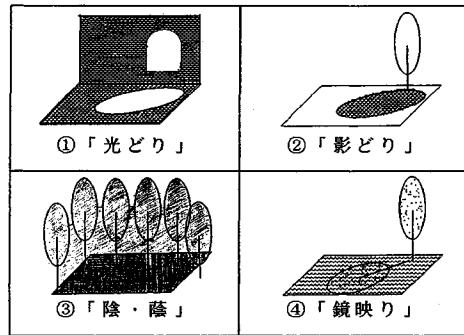


図2 陰影の基本類型

上でも重要な考え方であるため、若干の修正を加え、以下に記述する。

### (1) 陰影の基本構成

人が景観を鑑賞するという景観論的な考え方から、研究の基本視点となる陰影の基本的な構成を、景観把握モデル<sup>9)</sup>として図-1で定義する。

- ① 光 源：光の源（太陽、月、照明etc）
- ② 被 写 体：陰影の輪郭を作る被写対象物
- ③ スクリーン：陰影の映る面（路面、水面etc）
- ④ 陰 影：影（スクリーンに写し出される被写体の像）と陰（物に遮られまたは覆われた背面、後方の部分）の視覚現象
- ⑤ 視 点 場：陰影の鑑賞場

また、構成要素を以上の5つに仮定すると、陰影は、これらの要素の変化要因（季節・時間による光源の変化、被写体の移動変化、被写体の反射・屈折、視点場の見え）の組合せの中で、総合的な現象として成立していると考えられる。

### (2) 陰影の基本類型

大国語辞典<sup>10)</sup>に示されている「かけ」の辞書的意味から比喩的な意味を除き、陰影の現象に置き換えると、次のような基本類型が得られる。これを図-2に示す。

- ①「光どり」：地（スクリーン）が闇で、光源の光によって被写体が明るく映るタイプ
- ②「影どり」：地（スクリーン）が明るく、被写体が光を遮って後方にできる暗く映るタイプ
- ③「陰・蔭」：ものに覆われた薄ぐらい背面・後方に映るタイプ
- ④「鏡映り」：鏡のように被写体自身の姿が水面に映るタイプ

### 3. 「陰翳礼讃」に関する景観論的な整理手順

日本は、宮川が指摘するように、年間を通じて降雨量が多いために、湿気を多量に含んだ空気中を通る太陽光線は、欧洲と比較して強くもなく弱くもない「程よい日照」である<sup>11)</sup>。また、日照時間も長く、冬も暖かく明るい日が続く。このような気候的風土の中で、日本の伝統

的建築では、基本的には、自然との結び付きを失うことのない開放的な空間が発達し、その中で「外光」を光源として取り入れることのできる仮設的な工夫、すなわち軒の出、庇、簾、障子、明り窓等が発達した。

「陰翳礼讃」は、このような日本建築に現れる陰影に関して、「暗い部屋に住むことを余儀なくされたわれわれの祖先は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。」<sup>12)</sup>と評し、気候風土や建築材料等の理由から、自然に庇を深くしている所に大きな特徴があり、いつしか陰影のうちに美を発見し、陰影を利用する精神的な基盤があったことをわかりやすく具体的に述べている。

このように、「陰翳礼讃」は全部で16章より構成されているが、各章ごとに陰影に関する伝統的な美しさやその演出に関する評価がオムニバス的に記述されている。そこで、具体的な対象に沿ってすべての評論の対象となった陰影を抽出し、次の順にそって、景観論的な視点からの整理を行う。

STEP 1 陰影に関して具体的な対象物や空間を評論している部分を章ごとにすべて抽出する。ただし、評議内容が明確でないもの、個人的な嗜好であることを明記している場合は、対象より省くこととする。

STEP 2 STEP 1で抽出された評論部分に対して、先に定義した陰影の基本構成要素（光源、被写体、スクリーン、視点場）のどの要素に対する評議であるかを特定する。

STEP 3 構成要素の評議内容を文中の用語を用いて簡単な言葉で命名し、整理する。

### 4. 「陰翳礼讃」に現れる伝統的な陰影

前章の手順にしたがって抽出整理された日本の伝統的空间の陰影を表-1に示した。ただし、表中で網掛を示した部分は、文中に記述されておらず特定することできなかった要素である。

この章では、全章で整理された陰影について、各基本

表一 「陰翳礼讃」に評価された陰影

対象	該当章	評価用語	評価内容	光源	被写体	スクリーン	陰影タイプ	視点場
廁	2	薄明りの安寧	採光による視点場の演出 (薄暗さ・清潔・静けさ)	薄ぐらいい光線 ほんのりした障子		壁と木目	光どり	裏庭へ
日本紙	5	柔らかい光	光源の吸収的素材	紙を通す光			光どり	
食器	5	沈んだ翳り	光の中の吸収的な被写体 (濁った光を放つ素材)		支那食器 水晶		陰	
漆器	6	陰・闇の条件	闇の中で反射するスクリーン (つや・ふかみ)	燭台 (灯火の揺らめき)		漆器	陰	
料理 羊羹	7	陰・闇の条件	闇の中で反射する被写体 (瞑想的なつや)		羊羹・料理		陰	
日本建築 底・屋根	8	深い蔭	屋根と庇がつく 軒の深い陰影		庇・屋根		陰・影	
日本座敷	8	柔弱な光の軌跡 床うつり	柔弱な光が染み込む スクリーン 陰影の濃淡の美	障子(ほの明るい光) 土庇, 縁側		灰色の土壁 (濃淡の差異) (沁み込む光) 掛軸・飾り花・書画 (床うつり・古色)	光どり 陰・影	
床の間	9	疊轍たる限 幽玄味	座敷の凹みにできる陰 簡素な素材による幽玄			床の間・襖懸の後方 花活の周囲 違棚の下方・床脇の窓 床框の高さ	陰	
書院	9	書院の明り取り	力のないわびしい光 (外光の滲過)	障子・障子の棧			光どり	
金襷・屏風 金欄	10	金色の照り返し	闇の中で反射光を放つ スクリーン			金襷・金屏風	光どり	
能衣装 能舞台	10	地としての暗さ (大きな闇)	背景としての暗さの演出 (肌との対比)			能衣装(金銀の織り 出し・刺繡のある桂) 能舞台(軒先の闇)	陰	
歌舞伎舞台 人形淨瑠璃	11	暗さによる 柔らかさの演出	固い線を消去する陰影	薄ぐらいいランプ	女形・人形	歌舞伎舞台	陰・影	
女性	12	闇をまとう女性	陰影のあやの中で際だつ 首もと		着物(長い袂 ・長い裳裾)		陰	
広間 (角屋)	14	灯に照らされた闇	蠟燭が照らす 天井のつくる大きな闇	燭台(蠟燭)		広間の天井	陰	

構成要素ごとに具体的にその評価と表現例(『 』)を記述する。

### (1) 光源・採光の演出

#### ① 薄明りの安寧(採光による視点場の演出)

陰的な視点場における薄明りの情緒性、心理的な安定を示す、敷地の裏や奥にある人のつかない陰的な空間に窓を設け、庭の景色への視点場とし、薄明りの光(障子を通して自然光)によって情緒的な連想の中へ引き込み、心理的な安定効果を引き出そうとする演出である。

#### ・対象例<廁>(2章より)

『必ず母屋から離れて、青葉の匂や苔の匂のして来るような植え込みの蔭に設けてあり、廊下を伝わって行く……ほんのり明るい障子の反射を受けながら瞑想に耽けり、または窓外の庭の景色を眺める。……閑寂な壁と、清楚な木目に囲まれて、眼に青空や青葉の色を見ることの出来る……或る程度の薄暗さと、徹底的に清潔であることと、蚊のうなりさえ耳につくような静かさとが、必須の条件なのである。』(176頁より)

#### ② 柔らかい光(吸収的素材による光源)

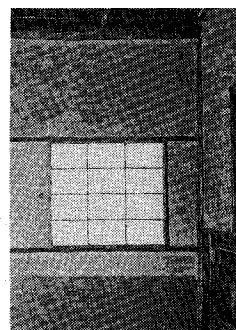
光の吸収性の高い障子で濾過された外光は、柔らかい光源となって室内の静寂さを演出する。

#### ・対象例<柔らかい日本紙>(5章より)

『奉書や唐紙の肌は、柔らかい初雪の面のように、ふつくらと光線を中へ吸い取る。そして、手ざわりがしな



写真一 廁



写真二 柔らかい光

やかであり、折っても畳でも音を立てない。それは木の葉に触れているのと同じように物静かで、しっとりしている。』(183頁より)

#### ・対象例<鈍い光>(8章より)

『太陽の光線の入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり、縁側を附けたりして一層日光を遠のける。そして、室内へは、庭からの反射が障子を通してほの明るく忍び込むようにする。われわれの座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に外ならない。』(193頁より)

#### ③ わびしい光(吸収的素材による光と採光周辺の隈)

書院の障子で濾過された光と、障子の棧にできる明暗の境のつかない隈が、わびしさを演出する。

#### ・対象例<書院の明り取り>(9章より)

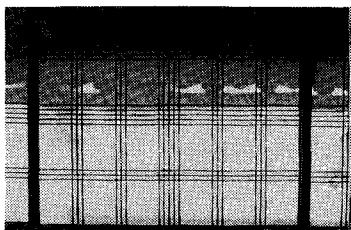


写真-3 書院の明り取り



写真-5 漆器

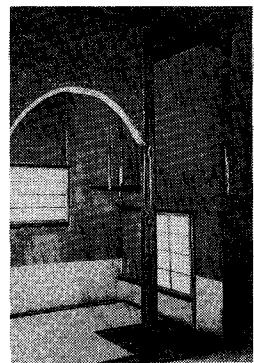


写真-7 砂壁



写真-4 燭台 (太陽 No. 261 より)

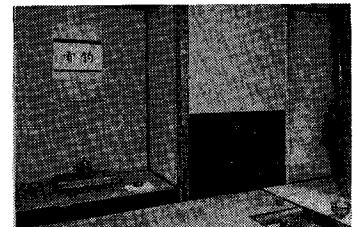
写真-6 陰の中の揺らめき  
(太陽 No. 261 より)

写真-8 床うつり (小学館原色日本の美術 15 より)

『明り取りというよりも、むしろ側面から射して来る外光を一旦障子の紙で濾過して、適当に弱める働きをしている。まことにあの障子の裏に照り映えている逆光線の明りは何という寒々とした、わびしい色をしていることか。縦繁の障子の桟の一とコマごとに出来ている隈が、あたかも塵に溜ったように、永久に紙に沁み着いて動かないのかとあやしまれる。……ほのじろい紙の反射が、床の間の濃い闇を追い払うには力が足りず、かえって闇に弾ね返されながら、明暗の区別のつかぬ昏迷の世界を現じつつあるからである。』(197頁より)

#### ④ 灯火の揺らめき

蠟燭や燈明の光は、静寂な空間にあって風などのかすかな変化を伝え、被写体やスクリーンの存在を演出する。

#### ・対象例＜燭台＞(6章より)

『暗い燭台に改めて、その穂のゆらゆらとまたたく蔭にある膳や椀を視詰めていると、それらの塗り物の沼のような深さと厚みとを持ったつやが、全く今までとは違った魅力を帯び出して来るのを発見する。』(187頁より)

#### (2) スクリーンの演出

##### ① 陰の中のつや (闇の色を映すスクリーン)

黒や茶色などの闇の色に近い色彩をもつスクリーンは、闇の中で、つやや深みを表す効果がある。

#### ・対象例＜漆器＞(6章より)

『「闇」を条件に入れなければ漆器の美しさは考えられないといつていい。今日では白漆というようなものも出来たけれども、昔からある漆器の肌は、黒か、茶か、赤

であって、それは幾重もの「闇」が堆積した色であり、周囲を包む暗黒の中から必然的に生まれたもののように思える。』(188頁より)

② 陰の中のゆらめき(闇の中で反射するスクリーン)  
『陰の中で輝くスクリーンに映るゆらめきの光』を示す。日常的な生活物品が、陰の中では、効果的なスクリーンとなって、変化のある蠟燭や灯明の光をより強調して映す神秘的な陰影の美を演出する。

#### ・対象例＜漆器＞(6章より)

『あのピカピカ光る肌のつやも、暗い所に置いてみると、それがともし火の穂のゆらめきを映し、静かな部屋にもおりおり風の訪れのあることを教えて、そぞろに人を瞑想に誘い込む。もしあの陰鬱な室内に漆器というのがなかったら、蠟燭や燈明の醸し出す怪しい光りの夢の世界が、その灯のはためきが打っている夜の脈拍が、どんなに魅力を減殺されることであろう。』(189頁より)

③ 柔弱な光の軌跡(光が沁み込む吸収的なスクリーン)

柔弱な光と柔らかいスクリーンによる繊細美を示す。軒や障子を通過した力のない柔弱な光が、座敷の弱い色の反射率の少ないスクリーンにとりついで、なんとかその軌跡を残している繊細な陰影美を演出する。

#### ・対象例＜砂壁＞(8章より)

『われわれは、この力のない、わびしい、果てしない光線が、しんみり落ち着いて座敷の壁へ沁み込むように、わざと調子の弱い色の砂壁を塗る。・・・われらは何処までも、見るからにおぼつかない外光が、黄昏色の壁の

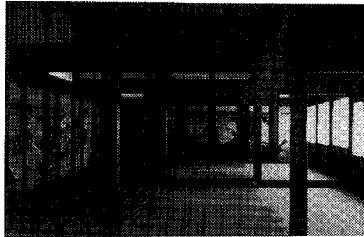


写真-9 金襷

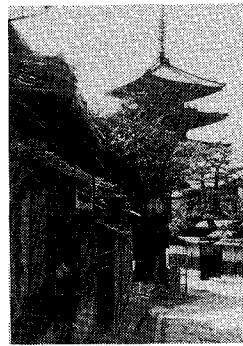


写真-10 屋根がつくる影

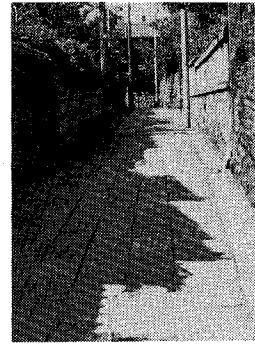


写真-11 庇がつくる影

面に取り組んで辛くも余命を保っている、あの繊細な明るさを楽しむ。』(193~194頁より)

#### ④ わずかな濃淡の差異

砂壁のような面の凹凸の変化が一様でなくきめ細かいスクリーンは、光の多様な反射によって濃淡の差異が現れる。それは明確な濃淡の差異ではなく、不明瞭で繊細な差異である。

##### ・対象例<砂壁> (8章より)

『砂壁がその明るさを乱さないようにと唯一と色の無地に塗ってあるのも……色の違いというよりもほんの僅かな濃淡の差異、……壁の色のほのかな違いに依って、また幾らかずつ各々の部屋の陰翳が異なった色調を帯びるのである。』(194頁より)

#### ⑤ 床うつり (陰影の濃淡の美)

軸物、飾り花の持つ古色と床の間の暗さの調和、すなわち床うつりが良ければ、軸物と座敷の相互的な視覚効果を演出する。座敷の主景よりも全体の陰影効果を引き立たせることにねらいがある。

##### ・対象例<日本座敷> (8章より)

『尤も我らの座敷にも床の間というものがあって、掛け軸を飾り花を活けるが、しかしそれらの軸や花もそれ自体が装飾の役をしているよりも、陰翳に深みを添える方が主になっている。われらは一つの軸をかけるにも、その軸物とその床の間の壁との調和、即ち「床うつり」を第一に貴ぶ。……その絵はおぼつかない弱い光を受け留めるための一つの奥床しい「面」に過ぎないのであって、全く砂壁と同じ作用しかしていないのである。』(194頁より)

#### ⑥ 金色の照り返し (闇の中で反射光を放つスクリーン)

わずかな灯具の光を金箔地による反射によって全体照明に変え、人工光をも自然光に近づける工夫をし、薄命の世界を演出する。

##### ・対象例<金襷・金屏風> (10章より)

『暗がりの中にある金襷や金屏風が、幾間を隔てた遠い庭の明りの穂先を捉えて、ぼうっと夢のように照

り返しているのを見たことはないか。その照り返しは、夕暮れの地平線のように、あたりの闇へ実に弱々しい金色の明りを投げているのであるが、私は黄金というものがあれほど沈痛な美しさを見せるときはないと思う。……たったいままで眠ったような鈍い反射をしていた梨地の金が、側面へ回ると、燃え上がるよう輝いている。』(198頁より)

#### (3) 被写体の演出

##### ① 沈んだ翳り (光の中の吸収的な素材)

長い年月を通じて使われた食器や水晶石には、時代のつやを連想させる濁りを帯びた光、沈んだ翳りを見いだすことができる。

##### ・対象例<食器・水晶> (5章より)

『浅く冴えたものよりも、沈んだ翳りのあるものを好む。それは天然の石であろうと、必ず時代のつやを連想させるような濁りを帯びた光なのである。』(185頁より)

##### ② 屋根と庇がつくる深い陰影 (深い陰影をつくる被写体)

外部空間と室内空間のインターフェイス部分である縁には、屋根と庇がつくる深い陰影ができ、その領域を視覚的に分化している。自然との結び付きを失うことのない開放的な空間であり、「外光」を光源として取入れることのできる空間でもある。

##### ・対象例<日本建築の屋根・庇> (8章より)

『われわれの國の伽藍では建物の上に必ず大きないらかを伏せて、その庇が作り出す深い広い蔭の中へ構造を取り込んでしまう。寺院のみならず、宮殿でも、庶民の……ある場合には瓦葺きの大きな屋根と、その庇の下にただよう濃い闇である。』(192頁より)

#### (4) 暗さ・闇の演出 (陰影現象の効果)

##### ① 脳朧たる隈 (座敷空間の凹みにできる陰)

清楚な木材と壁でできた座敷の凹み(床の間)には、不变的な閑寂があり、虚無の空間を任意に遮蔽して、脳朧たる隈を生むようにしそれにより生じる陰翳の世界に幽玄味を演出する。

##### ・対象例<座敷の床の間> (9章より)

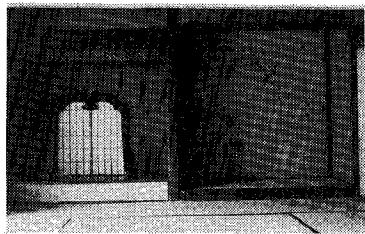


写真-12 脇たる隈

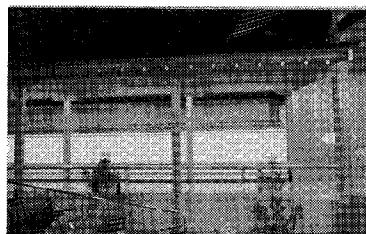


写真-13 橋掛

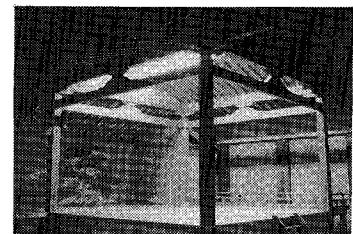


写真-14 能舞台

『唯清楚な木材と清楚な壁とを以て一つの凹んだ空間を仕切り、そこへ引き入れられた光線が凹みの此処彼處へ脇たる隈を生むようとする。……落懸のうしろや、花活の周囲や、違い棚には永劫不变の閑寂がその暗がりを領しているような感銘を受ける。われらの祖先の天才は、虚無の空間を任意に遮蔽して自ら生ずる陰翳の世界に、いかなる壁画や装飾にも優る幽玄味を持たせたのである。』(196頁より)

### ② 柔らかさの演出

暗さは、被写体の直線や硬い輪郭線を消去あるいは隠す効果があり、柔らかさを強調する効果がある。

#### ・対象例<人形> (11章より)

『昔の女形でも今日のような明煌たる舞台に立たせれば、男性的なトゲトゲしい線が目だつに違いないのが、昔は暗さがそれを適当に蔽いかくしてくれたのではないか。……人形に特有な固い線も消え、てらてらした胡粉のつやもぼかされて、どんなに柔らかみがあったであろうと、その頃の舞台の凄いような美しさ』(204頁より)

### ③ 地としての暗さ (地と図のコントラスト)

能衣装の暗く沈んだ色調や能舞台にある大きな闇は、地と図のコントラストを作りだし、主対象となる人間の皮膚の色を明りが射すように浮き立たせる効果がある。

#### ・対象例<能衣装> (10章より)

『およそ日本人の皮膚に能衣装ほど映りのいいものはないと思う。いうまでもなくあの衣装には随分絢爛なものが多く、……日本人特有の艶みがかった褐色の肌、あるいは黄色味をふくんだ象牙色の地顔があんなに魅力を發揮する時はないのであって』(200頁より)

#### ・対象例<能舞台> (10章より)

『床が自然のつやを帯びて柱や鏡板などが黒光りに光り、梁から軒先の闇が大きな釣鐘を伏せたように役者の頭上へ蔽いかぶさっている舞台、そう言う場所が最も適している』(203頁より)

### ④ 陰影のあやをまとう (陰翳の織りなす繊細な美しさ)

女性の着物などにできる物体と物体の作り出す陰影のあやは被写体の美しさを引き立たせる効果をもつ。

#### ・対象例<女> (12章より)

『われわれの祖先は、女というものを蒔絵や螺鈿の器



写真-15 座敷の天井

と同じく、闇とは切っても切れないものとして、出来るだけ全体を蔭へ沈めてしまうようにし、長い袂や長い裳裾で手足を隈の中に包み、或る一箇所、首だけを際立たせるようにしたのである。』(207頁より)

### ⑤ 灯に照らされた闇

闇がまとった対象として視認される現象である。空間の中で、一際際だった濃い闇がまとった存在としてその輪郭が浮かび上がる時、緊張感や怪しさを演出する。

#### ・対象例<広間の天井> (14章より)

『仲居が、大きな衝立の前に燭台を据えて畏まっていたが、疊二疊ばかりの明るい世界を限っているその衝立の後方には、天井から落ちかかりそうな、高い、濃い、唯一と色の闇が垂れていて、覚束ない蠟燭の灯がその厚みを穿つことが出来ずに、壁に行き当たったようにはね返されているのであった。諸君はこういう「灯に照らされた闇」の色を見たことがあるか。』(212頁より)

### (5) まとめ

ここで抽出された陰影についての特徴は、日本の伝統的空间に現れた陰影の特徴を示したものである。この結果を以下に再度考察してみる。

はじめに、光源や採光について得られた特徴は、次のように整理できる。

- ① 障子を通過した光は、物と物との境界を明確にしない柔らかさを演出する。
- ② 採光、光と近接して、闇や暗さが存在する。
- ③ 動きのない静的な暗さや闇の中で、微かな動きを示す陰影がある (蠟燭)。

つぎに、スクリーンについては、砂壁を中心とした部屋の輪郭面をつくる吸収性の高いスクリーンと、襖や漆器など室内のオブジェや可動物で小スケールであるが、反射性の高いスクリーンが指摘された。前者は光を吸収

し不明瞭で繊細な濃淡が現れる陰影であり、後者は動きや光の変化を示す陰影であることが指摘されている。

被写体については、水晶など光が吸収され沈んだ翳りを現す被写体、深く明瞭な陰影をつくる屋根や庇などが指摘された。そして、暗さや闇について、天井や座敷の窓みにできる暗さや闇は、不变的で静的なまとまった闇をつくり、これらは能舞台のように光の空間の輪郭を効果的に作り出すことが指摘できた。

さいごに、2章で定義された陰影の基本タイプについて、どのような結果が得られたのかを考察する。この結果は表-1に示されているが、これを見ると、圧倒的に「陰」のタイプが多いことがわかる。日本の伝統的な空間が、闇や薄暗さを大切にしてきたことを物語る結果と考えられる。この「陰」は、繊細な濃淡の差異や朦朧とした変化をもつものであり、深い奥深さをもつものであり、日本的な空間情緒の一つを作りだしたものと考えられる。そして、「影」は少数ではあるが、屋根や庇など室内と外部空間との境界に現れる影が指摘されている。また、「光どり」は、先述したように、自然採光を濾過した柔らかな光、金襴などの反射的なスクリーンに映る光などが指摘されている。そして、「鏡映り」は抽出されなかった。これは、建築内部を中心とした伝統的な空間の中で、鏡やガラスなどの反射的な素材が使用されることが少なかったことを示していると考えられる。

## 5. 結論

本研究では、日本の伝統的な空間における陰影の意匠性を把握するために、景観論的な視点から陰影の基本構成と基本類型を定義し、「陰翳礼讃」の陰影の表現から美的な陰影空間のサンプルを抽出し、その意匠性を整理記述した。以下に研究で得られた日本の伝統的な陰影をまとめた。

はじめに、光源・採光の演出の視点からは、薄明りの安寧、柔らかい光、わびしい光、灯火のゆらめきの4つを抽出することができた。次に、スクリーンの演出の視点からは、陰の中のつや、陰の中のゆらめき、柔弱な光の軌跡、わずかな濃淡の差異、床うつり、金色の照り返しの6つを抽出することができた。また、被写体の演出

の視点からは、沈んだ翳り、屋根と庇がつくる深い陰影の2つを抽出することができた。さいごに、陰影現象としての暗さや闇の演出の視点からは、朦朧たる隅、柔らかさの演出、地としての暗さ、陰影のあや、明りに照らされた闇の5つを抽出することができた。

一つの研究のみで景観計画への示唆を言及することは時期早尚であると思われる。しかし、ここで得られた陰影は日本の伝統建築が気候風土と融合して生み出した特化した意匠であり、コンクリート、鉄などで構成される現代の都市景観の中にもこのような意匠性の考え方を投影し静寂な景を作る可能性が残されていると思われる。

谷崎が示した日本固有の意匠性を文学の中だけに閉じこめないためにも、景観デザインへの展開を改めて考え直したい。

最後に、本研究の遂行にあたり資料整理等にご協力頂いた淡青社梶谷拓生氏、京都大学大学院荒川英司氏に深謝の意を表します。

## 参考文献

- 1) 日本建築学会編：建築設計資料集成・環境1, pp.51~88, 1978.
- 2) 土木工学体系編集委員会：土木工学体系13景観論, pp.253~269, 彰国社, 1977.
- 3) 谷崎潤一郎隨筆集「陰翳礼讃」pp.192~195, 岩波文庫, 1985.
- 4) 滝沢健児：すまいの明暗, pp.34~37, 中公新書, 1982.
- 5) ヘンリー・プラマー：建築；光の詩学, p.24, 建築と都市12月増刊号, 1987.
- 6) 芦原義信：隠れた秩序, pp.155~164, 中公文庫, 1989.
- 7) 前掲著3) p.221.
- 8) 川崎雅史・佐佐木綱：景観に現れる陰影の心理的評価に関する研究, 都市計画学会論文集No.25, pp.691~696, 1990.
- 9) 篠原修：土木景観計画, 新体系土木工学59, p.28, 技報堂出版, 1982.
- 10) 日本大辞典刊行会：日本国語大辞典, 小学館, 1975.
- 11) 宮川英二：風土と建築, pp.34~35, 彰国社, 1979.
- 12) 前掲著3) p.193, 岩波文庫, 1985.

(1991.7.11受付)

## DESIGN OF SHADOW AND SHADE IN JAPANESE TRADITIONAL SPACE

Masashi KAWASAKI, Hideyuki HORI and Tsuna SASAKI

In this paper we tried to draw a framework and conceptual model about shadow and shade in landscape to give new design vocabularies to urban design works. These subjects are studied by the essay.

We interpret the conceptual meaning of shadows by referring sentences and words in famous essay "Praise of Shadows" written by Jyunichiro TANIZAKI to real traditional space. As a result we can get characteristic shadows such as mild lights filtered by "shoji", darkness on hollow spaces of traditional room, lights and shades on the sand wall of traditional tearoom and shadows of roofs and eaves.